

やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

3. 東子明先生に学び 11 歳で山野辺学校教員を拝命した安達峰一郎

●学童期

明治5年、『学制』（学校制度）が公布され、同6年に山野辺学校が周辺13カ村が連合して設置されました。しかし、その後通学困難のため周辺の村が次々と分離していきました。

安達博士は、同8年7月に山野辺学校より分離して了広寺に設置した高楯学校に入学。そのとき、父の久も高楯学校の事務員となりました。父はその後教員の資格を取り、同10年から高楯学校の教員となったので、父からの指導も受けたのかもしれませんが。同12年には、分離した深堀、高楯、大塚が再び山野辺学校に統一されたので、安達博士も山野辺学校へと移り、まもなく卒業しました。

学校卒業後、安達博士は同12年7月に高楯の東海林寿庵（医師）家の私塾に入り、漢学を学んでいます。東海林家は高楯で3代（寿庵、良庵、泰庵）にわたって医者でした。安達博士が師事したのは2代目の良庵で、東子明とも呼ばれていました。良庵は医学を江戸で修行したとき勝海舟と親交があったということで、良庵の死後、門弟によって建立された『東子明先生碑』は勝海舟が揮毫（筆で書くこと）したものです。碑は元寿庵家の屋敷にありましたが、現在は山辺北部公民館の敷地にあります。

●進学をめざす

安達博士は、就学前は石川医師の寺子屋“鳳鳴館”、また、おそらく祖父が自宅に開いた“對賢堂”で学び、学校卒業後は、東海林家の“東子明塾”で修行して成長しました。

同13年10月に安達博士は、山野辺学校の教員助手に任命されました。当時、教員を養成する師範学校が創立されたのが同11年なので、どこの学校も資格を持っている教員が少なく、無資格の助手を任命している場合が多かった時代です。安達博士は卒業後わずか1年そこそこで任命されたのですから相当優秀な卒業生と見込まれていたと

思われます。

しかし、安達博士は翌年の3月に教員助手を辞めています。わずか半年で辞めたそのときの理由は不明ですが、同17年に上京して司法省法学校に入学すべく父にその許可を得るために書いた手紙のなかで、「碌々小学教員ニテ朽ルハ小子の屑トセザルモノナリ。」（自分はただ小学校教員として生涯を終わるのが本分ではない）と述べています。そして中学校に進み、さらに大学に入ることを目指していたので、小学校教員を長くしては目的を達成できないと考え辞めたのであろうと思われ

れます。そして、同15年に県が中学校教員を養成するための中学師範学予備科生を募集したので、それに応募し試験を受けた結果みごと合格。同年9月に入学して勉学に励んだのでした。

ところで、山野辺学校の教員助手を辞めた同14年4月から、中学師範学予備科に入学した15年9月までの1年半ばかりの間、何をしていたのかはっきりとはわかっていません。おそらく、その間に安達博士がその後の進路を決定づけたとみられる大きな事件が周辺で起こり、その影響を受けて新たな行動を模索していたのではないかと思います。次回はそのことについて述べていきます。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄

参考図書：後藤嘉一著『やまがた史上の人物』（昭和40年発行）



山辺北部公民館にある東子明先生碑